開　催　報　告

種　　別	２０２３年度第３回公開シンポジウム
開催日時	２０２４年　３月　２７日（水）１３時３０分　～　１７時００分
開催形式	対面開催
対面会場	中央大学多摩キャンパス GLOBAL GATEWAY CHUO（グローバル館） ６階６０４号室
共　　催	国際共同研究強化（B）「インドネシアにおける性的少数派とイスラームの関係」 （研究代表者：加藤 久典研究員(中央大学総合政策学部教授)）
講　　師	（１）田上　富久 氏（長崎地域力研究会代表、前長崎市長） （２）Arif Safri 氏（コーラン学研究所、イスラーム大学：インドネシア） （３）李 里花氏（中央大学総合政策学部教授） （４）加藤 久典研究員(中央大学総合政策学部教授) 司会：保坂俊司研究員（中央大学国際情報学部教授）
テ ー マ	「人類共生の可能性～社会の多様な差異の超克を目指して～」
参加者数	３０名

＜報告要旨＞

共生の思想の基礎的研究の一環として、今回は行政、宗教、民族、マイノリティという、異なる方向からの基礎的問題点の抽出や、その対応策に関して、それぞれの専門家から発表があり、会場を交えての議論を行った。

共生思想における人文・社会分野系のシンポジウムであったため、人文・社会領域の検討が主となった。

特に前長崎市長の田上氏は、16 年の首長経験をもとに、社会的共生に関して現場からその知見を発表されたが、その提言は極めて重いものであった。

Arif 氏は、イスラム正統のコーラン学者として、性的なマイノリティへの新たな解釈を踏まえ、インドネシア社会、主にイスラム社会における性的マイノリティの人々の救済活動を行っている。

李氏は、民族間の差別に関し、特に日本における朝鮮系夫人への二重差別に関しての社会学的な解釈を通じて現実社会における共生のあり方の難しさとその克服の必要性を論じた。

加藤氏は、インドネシア社会におけるマイノリティへも注がれる暖かい配慮、その社会的な互助システムに関し、共生思想を支える寛容思想の重要性を指摘された。

以上の四人の発表の後、会場からの質疑応答があり活発な議論が繰り広げられた。

司会は、研究代表者の保坂研究員が務めた。

多様な側面からの発表内容であったが、共生の思想形成には、その根本に寛容の精神が不可欠であるという事で、次回は、共生思想探求の一環として、寛容思想に関し検討することとした。

＜各講師による報告要旨＞

（１）「共生と分断のはざまを生き抜く力～長崎市長の経験をふまえて」

長崎は、鎖国時代に異文化との交流をいち早く経験した点、また、「被爆地」としての特異な体験をしたという点で 2 つの特殊性を有しているまちと言える。自治体の長を務める中では、この特殊性だけではなく、共生と分断に関わるさまざまな側面をみてきたように感じる。共生と分断の

両面を体感した経験を持つ前長崎市長として、「共生」のあり方や今後の展望について考察した。
（2）「性的少数派のアイデンティティを読み解く」
インドネシアの社会でトランスジェンダーなどの性的少数派が直面する現実を、アイデンティティ、トランスジェンダー、 文化、教義化、宗教をキーワードに、文化や宗教の視点から解説した。
（3）「日本における複合差別の歴史：在日朝鮮人女性に注目して」
グローバル化により多様な人々で構成される現代では排外主義が高まっており、日本でも過去に在日朝鮮人に対する差別が広まりヘイトデモやネット上の誹謗中傷が増加した。これは民族差別と女性差別が一体化した二重の差別であり「複合差別」と指摘されている。今回は日本で活躍した二人の朝鮮人女性舞踊家の歴史を辿りながら、彼女らが直面した差別や不可視化された側面を探求し、日本における複合差別の歴史について解説した。
（4）「寛容性について考える：インドネシアの事例に」
インドネシアは多様な民族や宗教が共存し、歴史的にも著しい多文化性が見られる。共存の重要性が国家形成とその維持には欠かせず、政治的には国家五原則が共通理念で、社会的には相手を受け入れる態度が重要とされる。発表では、インドネシアにおける社会的少数派がどのように社会に受け入れられているのかを考察した。また、テロリズム加担者の社会復帰や、イスラーム教義に反するトランスジェンダーのムスリムがどのように社会に存在しているのかについてフィールドワークを通じた考察を行った。